

# 浜 私 幼

(公社)横浜市幼稚園協会 協会報 No282  
加盟園・保護者の皆様へ

公益社団法人 横浜市幼稚園協会 発行  
〒221-0055  
横浜市神奈川区大野町1-25  
横浜ポートサイドプレイス アネックス5F  
電話 045 (534) 8708  
<https://www.kids-yokohama.or.jp>  
編集 横浜市幼稚園協会広報部  
発行者 苅込 大  
印刷所 株式会社横浜大気堂



- 第59回横浜市幼稚園教育研究大会
- 第61回神奈川県私立幼稚園教育研究横浜地区大会 開催

## 「未来に向かって 子どもが主役の幼児教育を」

令和4年1月22日(土) 神奈川県民ホール 大ホールほか



令和4年1月22日(土)、第59回横浜市幼稚園教育研究大会、第61回神奈川県私立幼稚園教育研究横浜地区大会が神奈川県民ホールの大ホール他で開催された。今年新型コロナウイルス感染症拡大と感染者増加の予防措置として会場では人数を制限し、午前中の全体会、午後の分科会共に全面オンライン配信とし、分科会は時間短縮での実施となった。

開会式では、運営委員長として小澤俊通神奈川県私立幼稚園連合会会長ならびに実行委員長である苅込大横浜市幼稚園協会会長より挨拶があり、続いて来賓を代表し、城博俊横浜副市長、山中毅神奈川県福祉子ども未来局子どもみらい部私学振興課長より祝辞をいただいた。

当協会の苅込大会長からは「本日のこの大会の申し込みを始めた直後にあっという間に1,000人の先生方が登録していただいた。本日の全体会、また分科会に2,100人以上の先生方の参加をいただいたことは、教職員の皆様の日頃から子どもたちにとって大切な利益を追求するという問題意識をもち、教育・保育に熱意をもって取り組んでいただいているという一つの表れである。幼児教育は子どもたち一人ひとりの人間形成の基礎を育むというとても重要な仕事だが、日々の積み重ねが大切であり、地道な努力が求められ、先生の悩みが尽きることはないと思う。やりがいがあると同時に重い責任がある仕事だと感じている。先生達がいいつも日々共感しておられる喜びや悩みを抱えていることもすべてこの大会に発揮していただく、それがまずは重要であると感じている。」と挨拶があった。

続いて、来賓として城博俊横浜副市長より祝辞をいただき「幼児教育は言うまでもなく子どもの生涯にわたる人格形成の基礎を築くものであり、大切な幼児期を過ごす幼児教育の充実と質の確保・向上の為、コロナ禍の中でも様々な工夫を凝らして取り組みを実施していただいていることに感謝している。未来を担う子どもたちの為、今後も創意工夫しながら幼児教育を担う皆様と手を携え、幼児教育の充実や質の向上に取り組んでいきたい。又、幼児教育に関する研究・研修や相談などを行う保育・幼児教育センターを令和10年に新たな横浜市の教育センターに併設予定である。引き続き、幼児教育・保育の質の向上と、先生方の主体的な学びの拠点を目指して整備を進めていきたい。」と説明された。



※写真の提供：株式会社 写真のワタナベ  
※IP無線機の協賛：株式会社 ニシハタシステム

全体会

講師 **遠藤 利彦**(東京大学大学院教育学研究科教授  
同附属発達保育実践政策学センター (Cedep) センター長)

テーマ

**生涯の土台を築く****乳幼児期におけるアタッチメントと  
非認知的な心の発達**開催日時 **2022年1月22日(土)**  
**10:00~12:05(式典含む)**  
開催方法 **YouTube/vimeo**

子どもが育つ環境の中でも最も重要なカギを握っているもの、それは当然子どもの近くにいる大人です。大人と子どもの関係で、私がこだわってきたのが、アタッチメントです。日本語で言うと愛着、意味はアタッチ=くっつくということです。ただし、皮膚と皮膚がぴったりとくっついて気持ちがいいよというスキンシップとは全く異なる意味の言葉です。誰彼構わず、いつ・ところ構わずくっつくという経験が大切と強調するのではなくて、子どもが怖くて不安な時、あるいは感情が崩れた時に、特定の信頼できる大人にくっついて、「もう大丈夫だ」と安心感に浸ること、元通りになり安心感を得ることです。

一人の人間を時間軸に沿ってずっと追いかけて調べ続けていくという縦断研究等を通して、通常環境の中で生活している子どもたちであれば、経験出来て当たり前のもので出来なくなると、心と体の全般にいろいろなダメージを受けてしまうということが明らかになってきました。その中でも自己と社会性と呼ばれる心の側面に最も深い傷がつくことが分かってきています。では自己と社会性って何でしょうか。「自己」にかかわる心の性質とは、自分のことを大切にできる力、自分のことを適度にコントロールできる力、もっともっと自分のことを良くしようとする力です。そして社会性とは、集団の中に溶け込んで人との関係を作り維持していくための力で、心の

理解能力の上では重要な要素です。「自己」にかかわる心の力の一番の基盤となる根っこには、自己信頼、無条件に受け入れてもらえる、愛してもらえる、愛してもらえるだけの自分には価値があるんだという感覚があります。一方、社会性の基盤となる根っこには、他者信頼、人って信じていいんだなと思える、他者に対する信頼感があります。例えその短い時間・期間であったとしても、幼少期の段階で、親に限らず無条件的に一回でもアタッチメントを持続的に特定の人の間で経験しておくことは、その後の人生の幸せや健康に繋がっていくと言えるのだと思います。これは、自己と社会性という非認知的な心の土台を身につけることが出来た子どもたちが、その後自分が頑張る中で、認知能力や学力も高めていく傾向が強いことを示しています。

そしてアタッチメントによって安心感に浸れている子どもほど、『見通し』という感覚を確実に保つことができるようになります。その感覚を身につけると、自発的にいろんな探索や冒険、チャレンジすることができるようになります。子どもというのは好奇心の塊です。しかしその一方で、不安や恐怖の塊でもあります。子ども時代というのは実は好奇心と不安の間を絶えず行ったり来たりしているのだと思います。

このようなことを安心感の輪で示すことがあります。



大人が担う二つの大きい役割、それは安全な避難所と安心の基地であることです。子どもが痛がる、怖がる、泣くことはあると思います。怖くて不安になると「あそこに駆け込めば絶対に大丈夫なはず」、と思える避難所という役割と、安心感が出たら「飛び出そう!」と思える基地という役割です。そしてまた怖くなったら「避難所に戻ろう」……。子どもが安心感の輪をどれだけ自然に安定して回れているかということが幼少期の段階の子どもの健康の発達の鍵であり、そこを強調するのがアタッチメントという考え方です。大人がこの二つの役割をバランスよく果たしてあげる必要があります。さらにはこの避難所で安心感を得て、元気になった子どもを自分の所に止めておくのではなく、あえて自分の身から離してその子どもの背中を押して、また一人であるいは仲間同士で探索や冒険に向かっていけるように応援してあげる、そして離れたところから、それを見守ってあげる、これが基地の役割ということになります。避難所で終わりではなくて、この基地の役割も含めて大人のアタッチメントにおける重要な役割、将来の土台を築くところに繋がっていると理解していただければと思います。

輪っかが広がっていくというのは、一人でいられる力を身につけて、一人でいられる時間が長くなる、これが子ども・人間の成長の発達です。しかしどんなにこの輪っかが広がって一人でいられる時間が長くなっても、この避難所と基地は決して消えてはいけません。むしろ、いざという時になったら、いつでもくっつけるという感覚を子どもがちゃんと持てるようになる。何かあった時に必ず戻れるところとしての避難所が、そしてまた何か思い立った時に、それをちゃんと応援してくれるところとしての基地が変わらずにあり続ける、それが重要です。

これが実は子どもの発達を支えていく、それこそ一人でいられる力、自立性の発達に欠かせません。さらにはアタッチメントの安心感の輪を回る中で、子どもは自らの遊びを深めたり仲間同士の関わりを広げていき、非認知と呼ばれる大切な心の要素を身につけていくことが出来るのかなという気がします。

私たち大人、子どもとかかわる大人というのは出来るだけ子どもたちに、特別なことを多くしてあげたいと思うものだと思います。しかし、実は何か特別なことを多くしてあげることに、大人がただ変わらずに避難所と基地としてあり続けることがすごく大切だということです。

## 教育研究大会を終えて

教育研究大会のオンライン開催の実現に向け、各部や若手の配信班が各会場のネット回線の確保・各会場や配信業者との協議などの事前準備を進めてきました。当日は、配信が時折不安定になるなどのトラブルもありましたが、スタッフのチームワークもあり、全体会・分科会ともに無事に終えることが出来ました。前例なき新しい形ではありますが、コロナ禍でも保育者の学びを止めず研修会を行う第一歩を踏み出せたのではと感じています。

	参加者数	参加園
全体会	1,975名 他、保護者参加	183園
分科会	1,986名	190園

(協会配信チームより)

第1分科会

特別研究委員会「1」

テーマ **耳をすまして 目をこらす** ～知りたいことは子どもの中に～

講師 **宮里 暁美 先生** (お茶の水女子大学アカデミック・プロダクション特任教授)

開催方法 **Zoom (ウェビナー)**

特別研究委員会1では、保育の中で子どものちょっとしたつぶやきや、素朴な姿から気づいたことをグループに分かれて語り合いました。今年度はすべてオンラインでの研修となり、ZoomとGoogleスライドを併用することで、写真や文字を画面上で張り付けながら進めていく方法にチャレンジしました。

コロナ禍の中で子どもや保育についても話題となり、例年との違いに悩むこともありましたが、行事を見直せた、一人ひとりにじっくり関わられた等、マイナス面ばかりではなかったことにも気づかされました。

これまでの語り合いを振り返ると「耳をすまして 目をこらす」ことは子どもが主人公の保育につながっているこ

とがわかりました。そして、子どもの姿の中に私たちの知りたいことを見つけることができるのだと再確認しました。  
(金港幼稚園 芝崎 恵子)



第2分科会

特別研究委員会「2」

テーマ **子どもとの対話を対話しよう** ～子どもとの対話から生まれる保育を考える～

講師 **三谷 大紀 先生** (関東学院大学教育学部 こども発達学科 准教授)

開催方法 **Zoom (ウェビナー)**

特別研究委員会2では、研究テーマにもあるように「対話」をキーワードに掲げ、参加者同士で対話を重ねていくことで、明日からの保育がよりワクワクすることを目指して学んでいきました。

研究会では、参加者がそれぞれの保育でいま取り組んでいること、これから取り組みたいことなどの写真を持ち寄り、考察しながら語り合いました。「互いに自園の子どもの姿を語り合う中で、参加者同士でアドバイスや意見交換を行い、それらを再び自分の保育に取り入れていく。」これを繰り返すことで日々の保育を探求してきました。

研究発表大会は、オンラインで3名の先生方が一年間の実践提案をし、講師の三谷大紀先生にご助言をいただきながら

行いました。発表の内容は「環境構成の工夫から見えてくる子どもの姿」「子どもたちが生き物を愛でていくとき」「子どものつぶやきから始まる園行事」の3つで、どの発表も子どもたちの心情や気持ちに丁寧に関わりながら、時には同僚とも対話することで子どもに寄り添う保育にチャレンジしていました。

参加していただいた皆様の保育に、研究発表内容が活かされれば幸いです。  
(すぎの森幼稚園 吉野 孝洋)



第3分科会

特別研究委員会「3」

テーマ **気になる子の視点で保育を見直してみませんか** ～あの子がいると大変! でも、あの子がいるとおもしろい～

講師 **久保山 茂樹 先生** (国立特別支援教育総合研究所インクルーシブ教育システム推進センター上席総括研究員)

開催方法 **Zoom (ウェビナー)**

「気になる子を一人思い浮かべてみてください。」「その子は一言で表すとどんな子ですか?」久保山先生のそんな投げ掛けから始まった特研3。多様性に富んだ子ども達。気になる子はなぜ気になるのでしょうか。「大変だな」「難しいな」なんて思ったりもしますが、みんな価値ある素晴らしい存在。

特研3では研究対象となる各自の「気になる子」の事例を持ち寄り、参加者同士で気づきを共有し、話し合い、ひるがえってそうした子の目線で保育の見直しを図って参りました。

気になる子はいつも周りに合わせるために頑張っています。気になる子に求めるばかりではなく、多数派たる周りの子がその子のためにどれだけ変われるか挑戦してみたり、また、できないことばかりに着目するのではなく、いまできていることや持つ

ている力をより豊かにしていく視点であったりと、保育のまなざしによって捉え方やかかわり方は違ってくるものです。

本分科会を通して参加者の皆様はどのようなまなざしで子どもをみたいと思いましたか? 子どもの特性は簡単には変わらないかもしれませんが、それならまずは自分自身が変わってみる良ききっかけとなっていたら幸いです。  
(東幼稚園 岩岡 夏輝)



第4分科会

神奈川支部

テーマ | コロナ下で遊びを考える

講師 | 佐藤 浩代 先生 (東洋英和女学院大学人間科学部子ども学科 講師)

開催方法 | Zoom (ウェビナー)

神奈川支部では、ここ数年遊びについて研究を進めて来ました。R2・3年と新型コロナウイルス感染拡大防止により、分散登園や自由登園・消毒等様々な生活の変化がありました。そんな中で子ども達の遊びはどうなるのか？コロナ下の保育(遊び)をありのまま記録し、事例を持ち寄り話し合いました。そこから見えてきたのは、コロナ下であっても子ども達の遊びは変わらないことでした。園の方針や行事・時間等の制約の中で保育者は、思いや葛藤に悩み、子ども達が思い切り遊べるよう環境・時間設定など工夫し、保育者も子ども達と夢中になって遊ぶことが遊びの広がりやの要因に繋がっていくのではないかと共有しました。

(羽沢幼稚園 越川 孝子)



第5分科会

保土ヶ谷支部

テーマ | クラスの中の気になる子、それぞれの悩みを持ち合いながら

どう援助したらいいのかな？ 環境はどう作ってあげたらいいのかな？ など、幼稚園にいる子どもたちの事例をもとに支援方法を一緒に考えていきましょう。

講師 | 守 巧 先生 (こども教育宝仙大学子ども教育学部教授)

開催方法 | Zoom

保土ヶ谷支部ではクラスの中の気になる子たちに、どう援助したらいいのかな？ 環境はどう作ってあげたらいいのかな？ などそれぞれの悩みを持ち合いながら、幼稚園にいる子どもたちの事例をもとに支援方法を一緒に考えてきました。それぞれの悩みから、4つの視点「環境構成」「保護者対応」「言葉掛け」「学級経営」を位置付け、7グループにわかれ研究してきました。研究の中では、自園や自分のクラスの課題などを出し合い、自園と他園との状況や環境の違いなども浮き彫りになり、自園の良さや課題が再確認できるようになりました。研究会の終わりには研究内容をグループごとに発表し、研究を通して導き出されたこと、研究過程なども深く考えていくことができました。分科会

では4グループの発表になりましたが、一連のプロセスも研究の大きな気づきや発見になったと思います。

(向原幼稚園 板津 由美子)



第6分科会

金沢支部

テーマ | 子どもと自然

講師 | 村松 亜希子 先生 (生態計画研究所 主席研究員 / NPO法人生態教育センター 理事 / 千葉大学非常勤講師) 開催方法 | Zoom

金沢支部では今年度「子どもと自然」をテーマに子どもと身近な自然とのかかわりについて事例を持ち寄り、対話を重ねてきました。分科会では子どもが自然とかかわって遊んでいる事例から、子どもが体験していることや感じていること、環境の果たしている役割や保育者の援助などについて気付いたこと、話し合ったこと等をグループごとに発表し、講師の村松先生から助言をいただきました。また、4園の園庭見学を通し、その多様な環境を体験することから感じたこと、学んだことを実際の園庭の映像も交えて参加者と共有しました。講師の村松先生からは身近な小さな自然にふれることから子どもたちの豊かな体験と学びが始まること、保育者も一緒に驚き、不思議がることで子どもの体験

がより深いものになっていくことを伺い、改めて保育者の在り様と自然や環境の果たす役割や意味を考える機会となりました。(認定こども園金沢白百合幼稚園 根津 美英子)



第7分科会

青葉支部

テーマ 屋外での保育実践より紐解く保育情報共有システムの試験的構築

講師 境 愛一郎 先生 (共立女子大学 専任講師 (屋外保育の意義・事例研究))  
山田 徹志 先生 (玉川大学教育学部教育学科 助教 (保育ICT導入検討・構築))  
宮田 真宏 先生 (玉川大学脳科学研究所 研究員 (保育ICTシステム運営・操作))

開催方法 Zoom

令和2年度から完全オンラインで研修を実施し、「保育者の学びを止めない」[皆で課題を出し合い検討する場] 空間の創出、活用する道具 (workspace for education) の利用方法を学びました。

令和3年度では、コロナ禍の保育として①制限が多い時代だからこそ遊びの引き出しを増やしたい。②特に屋外や地域での体験をさらに充実させたい。青葉支部の研修として①各園と地域の強みをともに育んでいきたい。②実際の保育で「使える」成果を得たい。③複数園が集まる研修という特性を活かしたい。このような背景から、昨年度に利用したツールを応用し、屋外遊びを中心とした「遊びアーカイブ※」を、保育者の手で作り上げることを構想し、今年度の目標としました。

本研究発表では、「遊びアーカイブ」の制作過程 (図1) および

完成したもの (図2) 等を報告しました。また研修参加者にも遊びアーカイブ作りを体験してもらえよう、課題を設定しグループワークを行いました。 (美しの森幼稚園 石渡 一郎)

※遊びアーカイブとは、ほしい遊びのアイデアを参加園で気軽にシェア、研修の枠外でも編集・閲覧ができる自己成長システム



図1 タグと個別データが記述されたJamboard。



図2 全エピソードをエクセルにまとめ、分析ならびに検索を可能にした。

第8分科会

栄支部

テーマ 子どもの生活と自立

講師 高橋 弥生 先生 (目白大学人間学部子ども学科教授)

開催方法 Zoom

栄支部では「子どもの生活と自立」というテーマのもとに、各幼稚園で研究内容を決め、子どもたちとのかかわりのなかで、それぞれ研究を深めてきました。Zoomによるリモート会議で、写真と文章で表すポートフォリオ形式で討議を進めてきた研究の成果を8園が発表をしました。その後、高橋先生から助言と生活習慣についてのお話がありました。

生活習慣とは、幼児期の発達課題である基本的な生活習慣 (食事・排泄・睡眠・清潔・着脱衣) とルールやマナーや挨拶などの社会的な生活習慣があります。習慣というのは熟練し無意識にできるものであるととらえると、これらができるということが自立していると言えます。これ

からの子どもたちには、自分のやりたいことがある、自己決定が出来る、他者コミュニケーションをとって協力するなど、自分を律しながら幸福に向かって行動できることが求められます。

今回、「子どもの生活と自立」というテーマと向き合い、保育者が意識を変えることで、子どもも意識が変わり予想以上に成長した姿を見せてくれるということがたくさんあり、子どもも保育者も一緒に見れる世界が広がるということを学びました。今後の保育に活かしていきます。

(小菅ヶ谷幼稚園 安藤 宗博)

第9分科会

泉支部

テーマ 乳幼児の性教育をはじめよう

講師 良 香織 先生 (宇都宮大学 准教授)

開催方法 Zoom

園生活の中で、子どもたちが『ウンチ! おチンチン! おしり~』などと笑いあったり、自分の性器を触ったり、先生の胸にタッチしたりする姿を目にすることがあります。

『赤ちゃんはどうやって生まれるの? どこから出てくるの?』そんな質問が出ることもあります。そんな時、保育者としてどう対応したらいいのかわからない、どう伝えたらいいのかわからないとき、私たち自身、性教育に関しての知識がとても乏しいことに気がつきます。

そこで、泉区のコミュニケーション研究班では宇都宮大学の准教授、人間の性教育研究協議会幹事である“良 香織先生”を講師に、性教育の理論を学び、保育の中で具体的に実践してその結果を共有しながら学びあうことにし

ました。

その中から私たちが学んだことは、私たち大人が科学的な知識を持って子どもたちに伝えようとするならば、子どもたちは真剣に聞くということです。

子どもたちがカラダに興味や関心を持つことは自分自身の心とカラダを守るために必要な学びであるということです。そして、自分のカラダを大切にすることは、まわりの友だちのことも大切にすることに繋がっていくということです。

乳幼児の性教育は包括的です。今回の研修で性教育の視点で保育を見直す機会になりました。今後もこの学びを現場の保育者と共有していきたいと思っています。

(なかよしこども園 菅野 清孝)



先日新年を迎えた気がしていましたが、もう3月ですね。お子さんはそれぞれ成長し、4月よりできることもたくさん増えたことと思います。コロナになり、3回目の春ですね。お店に入る時、手を除菌しマスクをつける子どもたちを見て、いろいろ思うことはありますが、子どもの順応力はすごいなと感心させられます。

ところで、“わかる”と“できる”の使い分け、できていますか。子どもへの声かけで、「何度言えばわかるの」「わかっているならちゃんとしなさい」というセリフ、言ったことはありませんか。私はよく使ってしまう。誰もが一度は発したことがある、つい口から出てしまう言葉ではないかと思えます。

先日、お店の入り口で「だからマスクしなさいって」「わかっているならやりなさい」と声かけするお母さんがいました。その子は「わかっているよ～」と言いながら、マスクを目にあて「何も見えない～」とおどけていました。その子は目を隠していましたが、私にはお母さんの怒りが目に見えるようでした……。

お子さんが、適した行動がとれない時または好ましくない行動をしている時、“わかっている”からできないし何度も同じことをする……ということは、“わからせなきゃ!”という意識に陥りがちです。しかし、“わからないからできない(やってしまう)”のではなく、大半は“わかっているけど、しない・できない・やりたい”ことの方が多いものです。“わかっている”ということを前提にわからせようとする、言葉は命令や禁止事項ばかりになってしまいます。お子さんもわかっているのに、その声かけはあまり効果的ではなく、親御さん自身やお子さんにただただネガティブな感情を喚起させるだけのものになってしまいます。わかっているけれど……というときは、どうやったらできるようになるか、わかっていることを前

提とした上で、できるようにするためにはどうしたらよいかを考えることが大切です。

マスクで目を隠しお母さんを怒らせたあの子は、マスクをしなければならないことはわかっていました。あの時は、おそらくお母さんが怒ることを少し楽しんでた(もっと怒られちゃいますね)ことと、好きな絵柄のマスクだったようで「使ったら捨てちゃうからやだ」と話していました。お母さんが予備のマスクを渡すとすんなりつけ、お気に入りのマスクで手遊びしながら店内に入って行きました。「自分でそれがいいって言ったんじゃない!」とお母さんの怒りはMAXでしたが……。

子どもは好奇心旺盛で、思いついたことやその時にしたいことをします。私も自身の子育てで「早く」「わかっている?」「それより自分で靴下はいて」とつい言ってしまう。“わかる”と“できる”は別のも、子どもの思いや「ダメ!」ではない声かけを心がけたい……と頭では理解していますが、そこもやはり“わかる”と“できる”の違いでしょうか。わかっているはいますが、難しいですね。子どもの寝顔を見て反省する毎日です。

進級・進学の時を迎え、心配なこともたくさんあると思います。新しい環境に入って行く子どもたちは、適応するごとに大きく成長していくことと思います。そのさなかには、できていたけどやらなくなった、わかっているのになんで?といった様子を見せることもあると思います。そんな時には、“わかる”と“できる”は別のも、さて、今はどんな心模様かとぜひ寄り添っていただければと思います。

子育てに限らず、「わかっているはいるけれど……」、大人も多いですよ。イライラもやもや、悩んだり落ち込んだりしてしまうような時には、ぜひお気軽に電話相談をご利用ください。どうやったらできるようになるかを一緒に考えていきましょう。

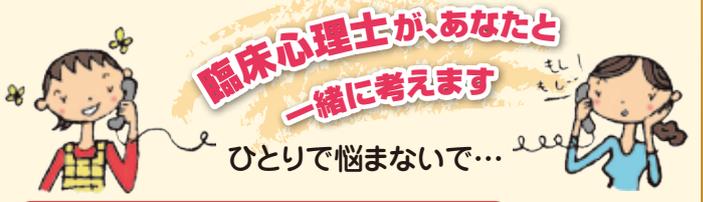
## 子育て教育相談室

【相談日】

【受付時間】

毎週**火曜日**・**金曜日**  
(年末年始、祝祭日を除く)

**10時~12時 / 13時~15時**



臨床心理士が、あなたと  
一緒に考えます

ひとりで悩まないで…

相談専用ダイヤル

# 045-534-8837

公益社団法人 横浜市幼稚園協会

https://www.kids-yokohama.or.jp



# その先に思いを



令和3年度 横浜市幼稚園協会父母の会連合会 会長  
松本 亜由美

今なお終わりの見えないコロナ禍の中、子どもたちの育ちと学びを守っていただいている先生方、教職員の皆様方に心より感謝申し上げます。

昨年5月から始まった活動は、オンラインミーティングや対面での人数を制限して実施しました。活動を通して子どもたちや幼稚園への思いを巡らせ、また協会報「浜私幼」の発行後には自分の幼稚園以外の方からもお声をかけていただくこともあり、とても貴重な経験をさせていただきました。そして、幼稚園・認定こども園の園長先生方が、子どもたちのために尽力してくださっていること、また今私たちが受けている保育無償化や保育・子育て支援はこれまでこのように行政に掛け合っていたからこそ受けられていることなど、多くの方々の

ご支援があり、子どもたちが守られてきたことを実感しました。

今年度も予定された活動で中止になったものもあり、例年通りの活動はできませんでしたが、その中で幼稚園大会の共催、横浜市会の各政党への要望活動、父母セミナーの開催を父母の会連合会役員5役の皆と共に無事に終えることができました。ご高配、ご指導賜りました役員先生方、常にサポートしてくださった事務局の皆様にご感謝申し上げます。

父母の会連合会は、子どもたちへの更なる教育の振興、幸せのために活動を続けて参ります。皆様におかれましても今後とも父母の会連合会の活動へ関心をお寄せください。1年間ありがとうございました。

## Congratulation

令和3年 秋の叙勲

瑞宝単光章

受賞 おめでとうございます

田野岡 由紀子 先生

学校法人山王台学園

認定こども園山王台幼稚園・

風の子こども園 園長



※瑞宝単光章：

国及び公共の公務等に長年にわたり従事し、功績を挙げられた方に対して、国家が表彰する勲章。

## ● 編集後記 ●

昨年の緊急事態宣言解除後、落ち着きを見せていた新型コロナウイルス感染症も、年明けと同時に急拡大し、神奈川県においても再び、まん延防止等重点措置が摘要されました。

皆様の園におかれましても、日々の保育や家庭生活において、少なからずご苦労があったことと拝察いたします。

幼稚園協会が取り組む諸活動においても、対面での開催からオンライン開催へと変更になったり、中止を余儀なくされる行事が少なくありませんでした。記事にもありますが、教育研究大会は午後の分科会も含めて初めて完全配信となりました。何事も、初めての試みには苦労が付きまとうものです。その苦労を乗り越えるのは、一人では大変なことでも、多くの方の協力を得ることで乗り越えられることがあります。新型コロナウイルス感染症が猛威を振るう中、こうして我々幼稚園・認定こども園が日々の保育と向き合えるのは、保護者をはじめとした多くの方々のご理解・ご協力あつての賜物と感謝申し上げます。

4月からは小学校へと進学されるお子さまもいらっしゃいますが、幼稚園・認定こども園で築かれた人との繋がりは、お子さまだけではなく保護者の方にとっても、一生の宝物となるはずで。一日も早く、マスクを外した対面で、人と人との繋がりが育まれる日が来ることを願います。

(広報部 久米 真浩)